

第4回市史講座ミニレポート：令和元年7月20日（土）

「出雲にきた渤海人」

大日方克己先生（島根大学法文学部教授）



1) 渤海国の場所・国家体制・その歴史

はじめに大日方先生は、渤海（ぼっかい）とはどこにあった国だったのかを説明されました。

渤海国は、現在の中国東北部から朝鮮半島北部、ロシアの沿海地方がその国域で、698年に高句麗遺民の大祚榮が牡丹江上流域に政権を樹立し、713年に唐から渤海郡王として認められて渤海国として成立しました。

平城京より狭い都ですが、上京龍泉府を中心にして唐の政治文化を取り入れた国家体制で、唐から承認された郡王が統治し、高句麗遺民、靺鞨（まっかつ）、ソクド人などの諸民族からなる多民族国を形成していました。しかし、926年に契丹（遼）の攻撃を受け、200年余で国家は消滅しました。【渤海国図→資料1ページ下】

2) 渤海使の来朝

渤海国を継承した民族がなく、現在ではその歴史は判明しません。しかし、唐・日本の史料からその国家像を知ることができるのです。

唐には郡王として認めてもらうため、頻繁に大量の遣唐使を派遣し、交際を深めていました。そして、日本へも渤海国の使いがやってきます。

その渤海使が日本海を渡り、日本に初来着したのは神亀 4 年（727）9 月 21 日でした。それ以降、34 回目の延喜 9 年（919）年 11 月 18 日まで続きます。【渤海使表→資料 11 ページ】

34 回のうち、1 回目から 14 回目の延暦 17 年（798）までは主に東北の出羽国方面への着岸が多く、15 回目の大同 4 年（809）以降は山陰・北陸へ着岸しています。前半期の日本は奈良時代で、後半期は平安時代になっていました。

3) 渤海使との交易

渤海使の主な目的は、天皇に国書を渡し、天皇から国王（郡王）への国書を持ち帰ることですが、それとともに交易も行い、主な品が東アジア・内陸アジアにいた黒貂（クロテン）の毛皮でした。当時は朝廷の儀式が外で行われていたため、貴族にとって冬に欠かせないのが、この黒貂の毛皮だったそうです。しかし、それからおよそ 100 年余のち、『源氏物語』の中では、黒貂の毛皮を着ている末摘花が、流行おくれのさえない女性として書かれていますから、この頃既に、日本では黒貂の需要は無くなっていたようです。

さらに、日本側は遣唐使を派遣せず、渤海使を介して唐のモノ・文化・情報を入手していたのです。それは、文化交流・情報提供の力量を持った人物が渤海使として日本海を越えてやってきたということになります。

毎回の来日総人数は 100 人余で、70～80 人を着岸地に残し、入京するのは大使・副使・判官・録事（僧）・訳語（通訳）など一部でした。着岸地の国では、入京した人たちが留守の間 6 か月位、帰還を待つ渤海人の接待をしなければなりません。乗ってきた船と共に 7 か月余

は寄港地に滞在しますから、その費用は莫大でした。ちなみに、出雲国に着いた初めての渤海使王孝謙の時、渤海使一行の供給に充てられた稲は、出雲国の一年間の正税利息収入の七割にも上ったそうです。都からは来着地とその近接国郡に「安置供給」という表現で食料などが提供されますが、その費用は担当諸国の財源から支出されることになりますから、地方国としては人民を巻き込む負担だったようです。

4) 出雲へ着いた 3 人の渤海使

今回の講演では、34 回に及ぶ渤海使来訪のうち、弘仁 5 年（814）9 月 30 日に出雲国に着いた最初の渤海使王孝廉、天長 2 年（829）12 月 3 日に隠岐へ来着した高承祖と随行した僧貞素、貞観 18 年（878）12 月 26 日に島根郡に着岸した渤海使楊中遠について話されました。

★王孝謙

王孝謙は漢詩に優れていて、『文華秀麗集』には交歓の詩として、王孝謙（5 首）と録事の釈仁貞（1 首）の詩が 6 首、日本貴族たちの詩が 4 首、載っています。王孝謙は出雲で帰国のため風待ちをしていた間の心境を詩に詠じています。〈海からの風は故郷に帰ろうとする思いを駆りたて、大空に飛ぶ北からの雁がわびしい心にさせるが、幸いにも雄雌つがいの鳳凰がわが旅に連れ立っていたので、辺地に滞在していることを憂えなくてもよい〉と長期滞在の心境を詠じています。しかし、王孝謙は故郷に帰ることはできませんでした。

彼らが着岸したのは、おそらく島根郡千酌駅であり、国庁に行ったかもしれませんが定かではありません。王孝謙の一行は弘仁 6 年 5 月頃、出雲国を出国しました。しかし、途中遭難し、船が大破したので越前国に漂着し、ここで新船を建造中に王孝謙は疱瘡で亡くなってしまいました。6 月 14 日のことです。続いて判官の王昇基、録事の釈仁貞も亡くなりました。

弘法大師空海は王孝謙の死を悼み、〈一度会ったきりの自分でも訃報を聞いて切なく思えるのに、帰国を待っていた家族の心はいかばかりだろう〉と詠んでいます。二人は空海が遣唐使藤原葛野麻呂に随行して唐に入った時に会っているようです。日本からの遣唐使は 805 年 1

月から6月まで滞在しますが、空海は葛麻呂らと別れ一人長安に残りましたので、806年と807年に長安に来た渤海からの遣使朝貢の中に王孝謙がいて、親しくなっていたと史料から推測されます。

★高承祖と僧貞素

天長2年(829)に来朝した高承祖らに対し、日本の朝廷からの処遇が変わりはじめていました。それは、歓迎し詩を交わしたりしていた朝廷貴族の中から、渤海使は頻繁に来航して来るから12年に1度にするよう通告しているのに無視して来航したことへの反発、そして、渤海使の実体は「商旅」(商人)であり、入京させて客扱いするべきではない、それに朝廷の行事で多忙であるし、入京させ滞在させると百姓の負担となるから帰国させようとの意見が多くありました。これは弘仁14年(823)に即位した淳和天皇後の朝廷の動きだったようですが、前の嵯峨天皇の外交の体制で、とりあえず高承祖一行は入京を強行します。しかし、淳和天皇は彼らと会わず、わずか7日間の在京で帰国に至っています。

この高承祖に随行した僧貞素は、延暦2年(805)に遣唐使船で空海・最澄らと長安に入った日本人僧の一人である靈山と関わりがありました。靈山はサンスクリット語に精通し、インド人の般若三蔵が読むサンスクリット語經典を直ちに漢訳し、『大乘本性新地觀經』を完成させた中心的人物で、靈山が筆授・漢訳したとその奥書に書かれています。これは日本の僧が漢訳した唯一の經典であり、日本僧の中でただ一人、僧の最高位である三蔵と称された人物でした。

靈山は、長慶2年(822)に中国仏教の聖地である五台山七仏教戒院に籠ります。長慶5年、その靈山に対し、天皇が長安に送った金百両と勅書を届ける役を貞素が務めます。そして、貞素は靈山から天皇への返礼の仏舍利、新經、上奏文を託され日本に渡りました。さらに、日本から帰国する時、金百両を託されたので、太和2年(828)再び五台山に行きましたが、既に靈山は亡くなっていました。これを嘆き悲しんだ貞素が序文と詩を板に書き、壁に打ち付けていたことで、貞素と靈山の関係が分かったのです。そのことは承和5年(833)に遣唐使とともに渡唐した円仁が記した『入唐求法巡礼行記』に書かれています。渤海人僧の貞素は、日本と渤海を行き来していた僧だったのです。

★楊中遠

楊中遠は、貞観 18 年（878）に島根郡に着岸しますが、以前と違って日本側に入京を認められませんでした。都に入れるかどうか判断する「存問領客使」2 名と通辞が出雲国に派遣され、来朝目的などを尋ねられます。この時、陽中遠は「渤海国遣唐使救助の謝恩」だと答えますが、前回入京した渤海使から 4 年しか経っていないとの理由で、渤海国の国書は天皇に奏上されたものの、入京することなく帰国となりました。

このように、渤海国の歴史は 200 年余でしたが、初期の頃は日本側もその持ち込む情報・モノ・文化を得ようとしたのです。しかし、次第に渤海商人の活動が唐南部から南シナ海方面へも広がり、「唐商」（日本の国史）「渤海国商主」（円珍の書簡）などと記されるようになっていきます。このような状況の中、陽中遠の入京拒否をしたように朝廷もその目的を糺すこと、12 年に 1 度などの規制を設けたのです。

これまで、入京できなかった渤海使については、「放還」という門前払いされたかのようなとらえ方をしていました。しかし、実際は来着地で国司と朝廷から派遣された使者とが交渉し、持参した国書・文書の写しは朝廷に送られ天皇にも奏上されましたので、入京せずとも、来着地と京を結んでの外交は行われていたのです。

先生は最後に、渤海国との交流では北陸（加賀・能登・越前）ばかりが注目されているが、山陰地域においても交流があったことを広く子どもたちへ伝えることも、日本海を挟んだ地域との関係において必要ではないか、と結ばれました。